

差異への想像力とこれからの日韓関係——大学での初講義体験の回想から

柳忠熙（東京大学東洋文化研究所・特任研究員）

昨年、大学で日韓関係の歴史についてはじめて教える機会を頂いた。朝鮮・韓国の歴史に重点を置いた授業で、時期的には朝鮮末期から植民地期まで、つまり 19 世紀半ばから 20 世紀半ばにかけての日韓の近代史であった。この時期は日韓両国が西欧列強の影響によって開国や開化をせざるを得ない転換期だった。と同時に、東アジアにおける〈近代〉が始まった時期でもあった。日韓の近代が〈帝国／植民地〉に基づいた帝国主義の時代を経て形成されたことは、今まで外交や教育など諸分野に亘って往々に日韓両国のナショナリズムを刺激する要因となってきた。このような過去の歴史について日本の大学生は何を知っていて、そしてどのように考えていたのか、こうした問いが授業を担当するようになってまず頭に浮かんだ疑問であった。

最初の授業に際して、いつものことだが、なぜこの授業を受けるようになったのか、ということを生徒たちに尋ねた。予想のとおり、大半の生徒たちは、韓流ブームや韓国の観光経験などが理由で、もっと韓国を知りたいという答えであった。その中には、韓国の大学に交換留学生として行ってきた生徒がいて、現在の韓国の生々しい大学生活について聞くこともできた。

一方、それらとはかなり異なる観点で授業を受けた生徒が一人いた。その生徒は現在の日本における外国人に対するヘイトスピーチの現象に関心があって参加したと言ったのである。その生徒によれば、ヘイトスピーチをする人々の論理には理解できない側面があって、自分で朝鮮の近代史を知りたいという理由であった。

もう一人、韓国人の交換留学生がいた。私は毎回の授業で感想文や疑問を書いてもらうようにしていたが、その生徒は、そこにいつも高校時代の〈国史〉授業の内容を思い出して、そしてたまに私の説明がすこし不満だというニュアンスの感想を書き残した。その生徒は東アジアの近代史に関するほかの外国人留学生向けの講義を聴いていたようで、ある日、その授業での朝鮮の近代史についての説明が不十分でほかの留学生たちに誤解を与えるかもしれないと、私に訴えてきた。その生徒の気持ちは理解できないわけではないが、何がその生徒をそこまで熱くさせたのか、気になった。そのときにはその生徒に最初の授業で強調した「歴史像」の問題を喚起させることで、その〈もやもや感〉を治めようとしたと覚えている。

「歴史像」という概念は、日本史の成田龍一氏の著書から引いたものである。成田氏は、「歴史とは、ある解釈に基づいて出来事を選択し、さらにその出来事を意味づけて説明し、さらに叙述するものということになります。本書ではこれを『歴史像』と呼んでいきます」（成田龍一『近現代日本史と歴史学——書き替えられてきた過去』（中央新書、2012年）、ii 頁）と述べる。この「歴史像」についての説明は、歴史学を勉強する人にとっては当たり前のことであるかもしれないが（断っておくが、私は歴史学専攻ではなく、その隣接分野の文学や思想を主に研究する者である）、一般の人々、つまり歴史を学ぶことは歴史的事

実を勉強する、あるいは覚えることだと考えている人々には、今までとは異なる観点を提示してくれる概念である。とくに大学の学生たちの柔軟な思考のためには有効だと思う。歴史に向き合うとき、ある事実を選択する行為自体が自分自身のある観点に基づいているという〈自覚〉が必要であり、ひいてはその事実で他人を説得することができる妥当性をもつことが必要であるという考えが、「歴史像」という概念に前提とされている。こうした物事に対する思考には、そもそも世の中には、ある同じ出来事に対して、さまざま異なる観点と解釈が存在するという、異なる観点への寛容性がある。それは差異への想像力によって可能となる。この差異への想像力は、単なる空虚な状況で生まれるものではない。ある出来事についての具体的な知識によって可能となるのだ。この知識によって自分なりの観点での発想ができ、説得力が保たれるようになる。こうした「歴史像」への思考から生まれる想像力を学生にすこしでも理解してもらい、彼ら関わっている歴史と社会を自分なりの観点をもって理解しようとする態度に気付かせること、それが私の授業の究極的な目的である。そしてこれからの私の課題でもある。

あの韓国留学生は、私の原論的な説明では納得が行かない様子だったと覚えている。私はその学生に納得のいく史料などを取り上げて具体的に説明することができたとすれば、あの学生は納得した顔を見せたかもしれない。だが、そうした方法は知識の量と洗練された話法による説得だと言え、こうした具体的な知識のみでの説明では、究極的なレベルにおいて互いを受け入れることはできない。いや、そもそも人と人が理解し合うということ自体が無理かもしれない。誤解や異なる考えの摩擦のなかで、相手を〈理解しようとする態度やその試み〉が存在するのみだと私は思う。その韓国留学生のもやもやしているように見えた態度も、もしかすると、こうした理解と試みのある段階にあったものだったかもしれない。

前期と後期ともに、授業の最初と最後の感想が結構異なっていた。最初は歴史的事実を質問したり、授業の内容を要約して書いたりしたものばかり。しかし、最後のあたりになると、ある資料から自分の意見を述べるようになっていた。例えば、植民地支配による残酷さを語る学生もいた一方、植民地朝鮮における経済発展を統計資料に基づいて述べる学生もいた。その歴史的な判断はともあれ、何か史料を以て自分の観点を述べるようになったという点では嬉しいかぎりである。

今年で日本は敗戦、韓国は解放 70 周年を迎える。と同時に、日韓修交正常化 50 周年の年でもある。この半世紀の間、日韓の学者たちの交流を通じて相互の理解が深まったのは確かである。一方、一般レベルでのナショナリズムの雰囲気は依然として強く存在する。日韓両国の学生たちが自分の「歴史像」を持って、異なるさまざまな「歴史像」を理解できる態度や想像力を持つことになれば、これからの 50、70 年後にはすこし異なる社会的雰囲気になるかもしれない。つまり、日韓関係ひいては東アジア諸国の問題に対して、現在の思考の単一化を図るナショナリズム的な観点よりも、少しは余裕を持って異なる観点を受け入れる雰囲気が形成されるかもしれないのだ。